

どんな私でも、本当に大切な「私」です DV被害を受けた女性と子どもへの支援にかける思い



●聞き手 太田美田紀（ライター）
松本和子さん NPO法人女性ネットSaya-Saya（ややたや）代表理事

暴力被害を受けた女性と子どもへの支援を中心に、暴力と差別のない、「女性と男性・人と自然」が共生する社会を目指して活動するNPO法人女性ネットSaya-Saya。代表理事である松本和子さんは、相談や一時保護だけにとどまらず、ワークショップ、就労支援、支援者養成講座など7つの活動ユニットによるプログラムを構築。全国の自治体などでDVについての研修や講演も行っている。女性を取り巻く暴力や差別への支援にかける思いについてうかがった。

残りの人生は 女性のために使いたい

—女性ネットSaya-Sayaを立ち上げたきっかけを教えてください。

松本 女性ネットSaya-Sayaは、DVや性暴力など、さまざまな暴力被害を受けた女性と子どもの支援をしています。2000（平成12）年に立ち上げてから、今年で13年を迎えます。Sayaはインドネシア語で「私」。自分やまわりの人との「つながり」を取り戻し、人生を再構築することをイメー

ジして名付けました。

当時、私は精神科の斎藤学先生の「さいとうクリニック」でソーシャルワーカーとして勤務していました。全国からたくさんの方が診療を受けに来ていましたが、DV被害女性がとても多かったです。ほかに、過去に児童虐待を受けていたり、親のニーズに合わせ過ぎて自分が分からなくなったりした人もいました。治療は進んでも、その後のサポート資源が社会になく、すぐにまたクリニックに戻ってしまうという循環も気になっていました。共同代表として一緒に団体を立ち上

PROFILE ●まつもと・かずこ●

1948（昭和23）年生まれ。社会福祉士、精神保健福祉士。1987年から、東京都台東区の日雇い労働者の町・山谷地区にて「まりや食堂」（炊き出しや食堂など）や、「ほしのいえ」（自立支援など）の開設に参加。1995年より、さいとうクリニックにてソーシャルワーカーとして勤務。2000年6月、女性ネットSaya-Sayaを設立し、無料電話相談、自助グループミーティングなどを開始する。2008年7月、女性ネットSaya-SayaがNPO法人となる。全国の自治体などでDV被害に関する講演や研修も行う。

げた野本律子さんは、1993（平成5）年に「AKK女性シェルター」（現AWS女性シェルター）」という全国初のDVシェルターを立ち上げた方です。ご自身もアルコール依存症の夫の妻として全国を講演でまわり、一息ついたところでした。彼女もまた、シェルターを出た後の自立支援の資源がないことをどうにかしたいと思っていました。

二人でお昼ご飯を食べながら「残りの人生は女性のために使いたい。自分たちで何かを始めたいね」と語り合ったところから生まれたのが女性ネット Sava-Sava です。

遠くから通うのも大変ですから、無料電話相談ができるといいなと思っていましたから、まずはそこから始めました。なんといっても、電話1本でできますしね。その後、ニーズに合わせて自助グループミーティング、講演会や研修会、ステップハウス、就労支援、支援者養成講座、子どもプログラムなど、活動内容は広がっていきました。

抑圧の構造の 最底辺にいる女性たち

「女性のために何かをしたい」という思いはいつからですか。

松本 私は1987（昭和62）年からずっと、日雇い労働者の町、山谷にか



した。抑圧の構造の最底辺に置かれた女性たちが、その中でとても力強く生きていた。彼女たちの生き方に共鳴することがたくさんありました。

山谷では、私も何人かの女性を看取りました。かわり続けるうちに、彼女たちは自分史を話してくれるようになります。そこに、みなさんに共通したとても透명한魂を感じたんです。抑圧の最底辺の暮らしは、世代間連

かり続けていました。「まりや食堂」で炊き出しや安い食堂をお手伝いしたり、「ほしのいえ」というアルコール依存症の人たちのために作業所をつくったりしていたんです。そのプロセスで、日雇い労働のピラミッドの構造が見えてきました。初めは「かわいそうな人を助けてあげなくちゃ」というような理念で入っていったのですが、それはとんでもないおごりだということが分かりました。

山谷で暮らす人たちに問題があるのではなく、それを受け入れる社会の問題だということが見えてきたんです。本当に素晴らしい人たちのなかにギリギリの生活をしなければならず、それを選択せざるを得ない人たちがいるということを知りました。

その中でも、特に女性の置かれている状況は過酷でした。路上生活をおくる人たちのなかにぼつんぼつんと女性が出て、理不尽な暴力を受ける姿を見ま

鎖しています。みっちゃんという女性は北海道で生まれ、親からの虐待や性虐待を受けながら親戚じゅうを転々とし、中学になるころに一人で上京したと話してくれました。そして、歌舞伎町で売春を勧められ、そのシマを張っている親分さんの連れ合いになり、そこから逃れるように小さな子どもを連れて山谷のドヤに住んでいました。DV被害を受け、夫から逃げ回っていたんです。子どもは通報を受けて施設に入っていたそうです。

みっちゃんは、子どものことは一言も話せませんが、最後に入院したときに娘さんの話をしてくれました。会いたいというので私が探し出したのですが、娘さんは施設を出たものの生きる希望もなく、リストカットや自殺を繰り返してグループホームに入っていました。摂食障害もあつたようです。みっちゃんは娘と会うことができましたが、みっちゃんが亡くなった後、彼

女性ネット Sava-Saya の活動



女も自殺してしまいました。本当に悲しい連鎖だと強く感じました。そうしたエピソードが幾つも幾つもの私の中に残っています。

支援者側の自己検証 から Sava-Saya へ

松本 そんなことが重なり、作業所を通じて斎藤先生と一緒に、山谷で女性たちの問題、アルコール依存症の問題に取り組み始めたのですが、斎藤先生がクリニクを立ち上げる際に私もクリニクに入るようになりました。並行して山谷にもかわり続けました。斎藤先生は、研究者としてかわっていたので、山谷のいろいろな活動家や団体を横につなぐ研究会をつくることができました。あの当時は画期的なことだったと思います。

ただ、残念ながら支援者の男性から支援者の女性へのセクハラ問題があつたんです。それを契機に、女たちの会

を立ち上げ、「私たちはなぜここにかかわっているんだろうか」というそれぞれの自己検証が始まりました。

—どのようにして自己検証は行われたのですか。

松本 ロビン・ノーウッドの『愛しすぎる女たち』という本をテキストに、自分自身のことを考えてみようという動きです。「誰かのために何かしよう」といつているけれども、本当は自分のためじゃないか」「自分って何なんだ」という問いかけです。すると、やはり自分たちの共依存性や、誰かをお世話することで自分たちがパワーアップして誰かの力を奪っているというような自分像が見えてきたわけです。

山谷でいろいろな団体に所属して支援をしている女性たちが横につながり、集まって、そうやってみんなで語っているといういろいろなものが見えてきま

した。そこは、女性の居場所となり、自分たち自身で元気になる場所にもなっていました。そのときのイメージが Saya-Saya に引き継がれています。

— Saya-Saya は、お二人だけでのスタートですか。

松本 最初は二人だけでした。私は仕事も続けながらでしたし、まずは団体を認知してもらわなければなりませんから、斎藤先生が当時出版された『家族の闇をさぐる』という本をテーマに講演会を行い、毎月1回、地域の中でさまざまな講座を開いてきました。それと同時に、月曜日の仕事が終わって、午後6時半から8時半までの電話相談を自宅で始めたんです。

私も野本さんもそれぞれにネットワークを持っていたので、初めから

松本 自然派レストラン Saya-Saya です。ちょうどDV防止法（配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律）が公布され、施行された年でしたから、DV被害女性の自立支援のためにレストランができたという注目していただき、テレビ取材をたくさん受けました。厚生労働省の一時的な助成金を起業に使い、クリニックから

ステップアップの女性20人ぐらいが働く場所としてオープンしたんです。私はさいとうクリニックでの仕事を辞めて、Saya-Saya に一本化しました。取材がたくさんくるほど、珍しいことだったんです。DVといっても分からない時代です。お隣の交番に「DV被害女性が働いているから、Saya-Saya はどうにか聞かれても教えないでください」と話をしたら、「AV?」なんて聞き返されるぐらいでした。

社会へ出たときに、やはりふとした瞬間にフラッシュバックがあったり、

うつの波があつたりして仕事を続けられない人が多いんですね。社会に出るための練習の場が必要でした。

ただ、素人の経営ですから、理想だけ高くて、店を維持するのは大変でした。食事もヘルシーで美味しいんですけど、3人を常勤として月給18万円で雇って、パートの人も当時の最低賃金の時給650円を払っていましたから、大赤字を出し続け、厳しい現実をつきつけられましたね。助成金を申請したり、市民債というのを立ち上げて、共感してくださる方からお金を借りたりしながらずっと綱渡りでした。

午前中が自然派レストランで、夜はタイレストランという二重経営をしたこともありましたね。最初の常勤の3人のうち、1人は、慈愛寮という妊娠した女性の施設の調理師になり、もう1人は保健師の資格を持っていたので東京都の施設の相談員となりました。

今は、Saya-Saya の運営から切り離



ニーズはありました。トラウマや依存症、DVについてはまだあまり認知されておらず、地方では相談先がありませんから、九州、名古屋、東北など、全国から電話がかかってきました。

レストランを 社会へ出る練習の場」

—翌年の2001（平成13）年にはレストランをオープンして話題になったようですね。

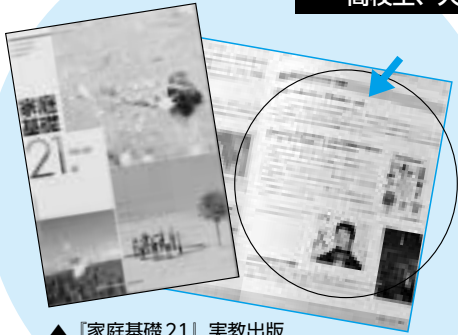
し、タイレストランとして続いています。今でもつながっていますので、就労支援に利用しています。

就労支援だけでなく 同時に心の支援も

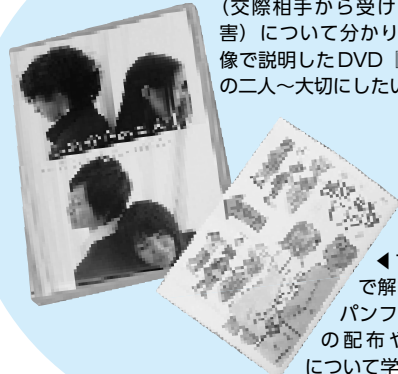
—連続講座や自立支援プログラムなども充実しています。

松本 役所で生活保護をもらって自立しろと言われても、そんなにパッパッとできるものではありません。いわゆる自立支援は行政にもありますが、資格の取得や就労の練習だけ。それだけでは癒されないし、力を出すことができません。精神的にも経済的にも、自分自身の力を取り戻す時間が必要です。今、生活保護バッシングのような社会的な批判がありますが、そうした現状をきちんと知ってもらえるように伝えていかなければとも思います。自己喪失は大きな病です。自分らし

高校生、大学生への教育



▲『家庭基礎21』実教出版
平成25年度版の高等学校の家庭科教科書『家庭基礎21』では、DV被害やNPO法人Saya-Sayaについて取り上げられている。



◀デートイングバイオレンス
(交際相手から受ける暴力被害)について分かりやすく映像で説明したDVD「これからの二人～大切にしたいから～」

◀マンガで解説するパンフレットの配布や、DVについて学が講義も行っている。

く生きるということがしつかり身につけ、すり込まれた価値観も変えることができ、初めて「私」というものが浮き上がるわけです。また、それができれば仲間を支えることもできます。Saya-Sayaの特徴は、自分の体験を生かして、後につながる仲間を支援していきけることだと思います。

ハードな部分は行政がやって、中のソフトはやはり民間が丁寧に、本当に一人ひとりに合わせてきめ細かくやっていく必要があると思っています。そこで、必要と思われる講座は広く取り入れるようにしています。

—子どもたちへの支援も同時になさっていますね。

松本 被害に遭った女性と一緒に来ている子どもたちの様子がずっと気になっていましたので、子どものセラピーや学習困難な子どもたちの支援も



いろんな気持ちの表情をイラスト化。自分の気持ちがわからないときにはこのイラストを見ながら、気持ちを探す練習をする

行っています。

今、行政でもその必要性を理解し、取り入れてくださるようになりました。「びーらぶプログラム」というDV被害女性とその子どもたちに心理教育プログラムを行えるインストラクター養成を全国的に広めているところで、横浜、浜松、名古屋、三重、京都、徳島、長崎、熊本、秋田、青森などから、依頼を受け、講座を修了しました。子どもたちが早い時期に心をメンテナンスされることは、とても大事なことです。子どもたちは言語化できない

分、心に傷をためています。DV被害女性もそうですが、自分の感情や気持ちよりも先に相手の様子をうかがうのです。「怒り」は自尊心が傷ついたときにおこる大事な「気持ち」で「暴力」という行動とは違うこと。どんな気持ちも大事だが、行動は選ぶことができるということをしつかりと伝えていきます。

暴力被害を受けると、相手の気持ちは相手の気持ち、私の気持ちは私の気持ちという境界線がなくなってしまう。加害者にも、自分が思ったことを、相手も同じように考えるのは当然だと思ってる人は多いですから。自分の気持ちにチェックインする練習をしていかなければなりません。そうすることで、だんだん自分にシフトして自分をケアして、力を取り戻していくということにもなります。

大人であっても言語では癒されない

部分がありますから、リラクゼーションやヨガや気功なども、とても有効です。私自身も、カウンセリングをしていると二次受傷しやすいのですが、気功でとても楽になりました。そういうものも、プログラムの中に総合的に取り入れるようにしています。

どんな私でも、 本当に大切な私

—これからも活動の幅はますます広がっていきそうですね。

松本 支援者を養成していく中で、スタッフもずいぶん増えました。NPOの社員としては24人、ボランティアも含めると40人ぐらいでしょうか。

最近は高校生や大学生にむけて、DV予防のための教育も行っています。デートイングバイオレンスについてのパンフレットを使って講義をしたり、DVDを上映したりしています。

夢もたくさんありますが、大きな夢は、母と子が一緒に暮らすことが困難な場合でも、同じ施設で食堂だけ一緒など、お互いに顔を見られる環境で心のケアができる施設をつくりたいということ。もうひとつは、1カ所で法的、医学的、心理学的、社会的支援を受けて回復できるワンストップセンターの設立です。役所でたらい回しにならずに、1カ所に滞在しながらすべての手続きができるような、安心できる場所がほしいですね。思いきって飛び出してよかった、逃げてよかったと思えるようなところをつくりたいものです。

女性たちが、社会の理不尽さや暴力に閉じ込められ、抑圧される必要はありません。誰もが本当に自分らしく解放されて、「だめな私でもいいじゃない」「どんな私でも、本当に大切な私なんだよ」という空気に包まれて、安心して暮らせる社会をつくっていききたいと思っています。